

フリークライミング授業が大学生の信頼感に及ぼす影響

渡邊 仁*

The Effects of the Free-Climbing on Trust of Students

WATANABE Hitoshi*

1. はじめに

中高年の登山ブームは、深田久弥の「日本百名山」⁵⁾に多大な影響を受けて発展してきたが、現在では成熟した様相すら感じられる。近年では、中高年登山者だけでなく、若年層が、「山ガール」や「森ガール」といったファッションを楽しみながら、気軽に登山に取り組むようになってきている。このトレンドは、登山用品やアパレルメーカーが綿密なマーケティングを基に作り出していると言えるのだが、登山に対するイメージが以前よりポジティブになっており、業界全体の活性化に繋がっている。例えば、民間の室内クライミングウォールの急速な増加は、単に人工壁の施工技術の発展が理由だけでなく、この背景の延長線上にあると推測できる。かつての硬派な「岩壁登攀」ではなく、オシャレでかつこ良い「フリークライミング」の興隆は、今の若者達の指向に一致しているといえるだろう。

上述した社会的動向に呼応して、フリークライミングを体育授業の一つとして導入する大学が増え始めている。近年、徳山⁹⁾は、大学体育授業としてフリークライミングを行い、その一般教育として機能する過程を検討している。そして、フリークライミングには、身体を備えた立場から「自己」「他者」「自らの相互作用に位置づく生活世界」を理解することを可能にする旨を指摘している。また、永井ら⁶⁻⁸⁾は、冒険活動を含むキャンプ経験が青年期の

信頼感の向上に影響を与えることを報告しているが、冒険的側面を持つフリークライミングにおいても、その改善に期待ができると思われる。しかし、大学授業としてフリークライミングを対象とした研究はあまり見られない。このように本研究では、健康なパーソナリティの第一の構成要素である「基礎的信頼感」¹⁾の重要性に着目し、フリークライミングによる信頼感への影響を検証する。

なお、本報告においては、量的データの分析結果のみを提示し、質的データに関しては紙面の都合で割愛する。

2. 研究方法

2.1 対象

2010年度A大学の必修体育(2クラス分)を受講した1年生57名、および2011年度A大学の選択体育「クライミング」を受講した2年生以上の学生14名のうち、データに欠損のない計55名(男24名、女31名)を対象とした。なお、前者の必修体育は、教養教育としてのスポーツ文化の理解と習得を目指しており、前期には様々なスポーツ種目に取り組み、後期を通してクライミングを行った。

2.2 授業概要

対象とした必修体育および選択体育の授業は、後期期間(9月～翌年1月:全13回前後)に、筆者

表1 授業概要

授業局面	実施した形式	主な内容
初期	ボルダリング	基礎知識の理解(用具、ルール、用語等) 基礎技術の習得・体力の強化(3点支持、基礎ムーブ、支持力強化等) グレードシステムの理解(段級)
中期	ボルダリング トップロープクライミング(任意)	ロープワーク(8の字結び) トップロープのビレイ方法(ハーネス装着法、ロープ連結法、ビレイ器使用法等) 安全に対する視点
後期	ボルダリング トップロープクライミング(任意) リードクライミング(任意)	グレードシステムの理解(デシマル、UIAA、フォンテーヌブロー) リードのデモンストレーション リードの注意点(逆クリップ、Zクリップ、ビレイ方法等)

* 筑波大学体育系
Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba

が授業指導を行った。また各回の授業構成は、①ストレッチ (5分)、②ウォーミングアップクライミング (15分)、③小講義 (10～15分)、④メインクライミング (40分)、⑤振り返り (10分) を基本とした。なお学習内容は、表1の通りであった。

2.3 調査と手続き

(1) 信頼感の測定

受講学生の信頼感を測定するために、天貝^{1,3)}が作成した24項目からなる「信頼感尺度」を用いた。信頼感尺度は、「自分への信頼」、「他人への信頼」、「不信」の3つの下位因子から構成されており、対人的信頼感を多次元に測定できることが特徴である。本研究では、「非常によくあてはまる(4点)」「少しあてはまる(3点)」「余りあてはまらない(2点)」「全くあてはまらない(1点)」の4段階評定で行った。第2回目授業開始直前(以下Pre)、第11回目授業終了直後(以下Post)の計2回測定を実施した。なお統計処理にはSPSS ver.21 for Macを用いて、性・群および測定時期を要因とする分散分析を行った。

(2) 質的データ

結果をより多角的に考察するために、①授業後レポート、②参与観察から得られた質的データを適宜分析した。

3. 結果

3.1 信頼感の変化

(1) 全体

表2に、対象者全体に関する信頼感の平均値と標準偏差を示す。次に、3つの下位因子(「自分への信頼」「他者への信頼」「不信」)の変化を検討するために、因子ごとに測定時期を要因とする一要因分散分析を行ったが、いずれの下位因子も変化は認められなかった。

(2) 性差の比較

表3に、性別の違いによる信頼感の平均値と標準偏差を示す。次に、3つの下位因子ごとに性別と測定時期を要因とする二要因分散分析を行ったが、いずれも変化は認められなかった。

(3) 高低群の比較

受講前における信頼感の高低の違いによる変化を検討するために、各々の下位因子 pre 得点を基に、低群(27名)と高群(28名)に分類し、群と測定時期を要因とする分散分析(2×2)を行った(表4、図1～2)。その結果は、次の通りであった。

「他者への信頼」は、群と交互作用に有意差が認められた(群: $F(1, 53)=35.15, p < .01$ 、交互作用: $F(1, 53)=7.22, p < .05$)。また、交互作用分析の結果、群は pre と post とともに単純主効果に有意差が認められ、測定時期は低群にのみ単純主効果が有意に向上した。つまり、もともと「他者への信頼」を弱く感じていた者に限っては、その信頼感を強めたことを

表2 信頼感の平均値と標準偏差および分散分析結果(全体)

下位因子	平均 (SD)		F値
	pre	post	
自分への信頼	17.1 (3.4)	17.3 (3.8)	0.74
他者への信頼	24.7 (4.1)	24.9 (4.1)	0.45
不信	23.3 (5.5)	23.9 (6.1)	1.01

全体 (n=55)

表3 信頼感の平均値と標準偏差および分散分析結果(性差)

下位因子	性	平均 (SD)		分散分析 (F値)		
		pre	post	性別	測定時期	交互作用
自分への信頼	男	17.7 (3.2)	18.4 (3.1)	2.65	1.06	1.78
	女	16.6 (3.5)	16.5 (4.1)			
他者への信頼	男	25.3 (3.5)	25.4 (3.3)	0.87	0.41	0.03
	女	24.2 (4.4)	24.5 (4.6)			
不信	男	24.0 (5.1)	24.4 (6.0)	0.63	0.89	0.10
	女	22.7 (5.8)	23.5 (6.1)			

男 (n=24) , 女 (n=31)

表4 信頼感の平均値と標準偏差および分散分析結果（高低群）

下位因子	群	平均 (SD)		分散分析 (F値)		
		pre	post	群	測定時期	交互作用
自分への信頼	低	14.3 (2.2)	15.1 (3.6)	54.57**	0.80	2.14
	高	19.7 (2.0)	19.5 (2.6)			
他者への信頼	低	21.7 (3.7)	22.9 (4.4)	35.15**	0.57	7.22*
	高	27.5 (1.7)	26.9 (2.5)			
不信	低	18.7 (2.3)	20.3 (4.7)	66.10**	1.10	2.88 †
	高	27.7 (3.8)	27.3 (5.2)			

低群 (n=27) , 高群 (n =28) † p<.10 * p<.05 ** p<.01

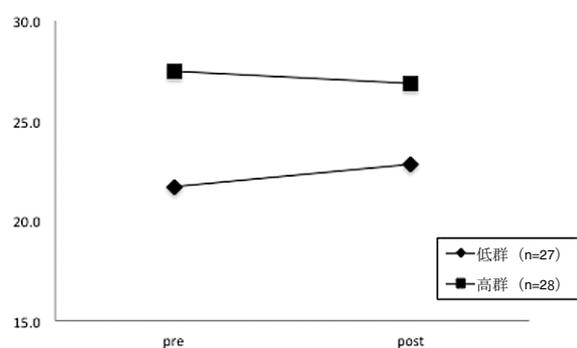


図1 他者への信頼（高低群）の変化

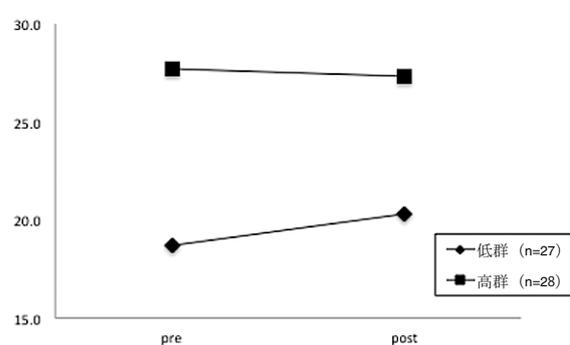


図2 不信（高低群）の変化

意味する。これに対して、「他者への信頼」を強く感じている者は、授業前後にその信頼感に変化しなかった。

「不信」は、群に有意差が認められ ($F(1, 53)=66.10, p < .01$)、交互作用は有意傾向を示した ($F(1, 53)=2.88, p < .10$)。また、交互作用分析の結果、群は pre と post とともに単純主効果に有意差が認められ、測定時期は低群にのみ単純主効果が有意傾向を示し低下した。つまり、もともと「不信」を感じていなかった者が、やや「不信」を感じるようになった。これに対して、もともと「不信」を強く感じている者は、授業前後にその信頼感に変化しなかった。

4. 考察

クライミング課題の特徴は、半恒久的にその難易度（レベル）が変化しないことである。そのため、課題をクリアできるかどうかは、客観的に自身の成長度合いを評価することに繋がる。この点は、他のスポーツ種目より顕著な部分であろう。つまり、「自分への信頼」に向上が見られなかったのは、授業という枠組みであったため、課題への取り組み時間が短く、十分な達成感を味わうことができなかったこ

とが要因として考えられる。渡邊ら¹⁰⁾の研究においても、クライミングの内的体験としても、「達成感」「一体感」を抽出している。特に、「自分への信頼」を高めるためには、この点を考慮する必要があるだろう。

また、ロープクライミングにおいて、クライマーとビレイヤー（確保者）が一本のロープで結ばれることは、互いの身体を他者に委ねることであり、身体的かつ心理的一体感を味わうことになる。特に、クライマーは完全に他者に身体を預けることになり、またビレイヤーは自身の身体のみならず、他者の身体もコントロール下に置くこととなる。つまり、ビレイヤーは他者の命を預かるという、日常生活では体験ができない特殊な状況下に置かれる。このようなクライミングというスポーツの構造的側面が、「他者への信頼」感の醸成に影響を与えたと考えられる。たとえ他者を十分信頼しきれない者であっても、クライミングというスポーツが成立するためには、この構造が必要不可欠である。この構造的な必然性が有効に機能し、「他者への信頼」を高めたものと推測される。

なお、受講生に対して、ロープクライミングの実践は任意とし強制はしなかった。結果的には、9割

以上が主体的に実践をしていたが、質的データ（レポート等）を分析すると、ロープクライミングを行っている他者の様子を見ているだけでも、他者認知の変化を意味する記述を確認できた。

クライミングを通して、不信を感じていなかった者が、多少不信を感じるようになった。この結果を、ポジティブに解釈をするならば、ロープクライミングは慎重な行動を要求される活動であり、ある意味、彼らは適切な用心深さを持つようになったと言える。あるいは、ネガティブに解釈するならば、命を預けるロープクライミングの体験により、不必要に疑り深くなったのかも知れない。いずれにしても、本結果からは判断は困難であった。

5. まとめ

フリークライミング授業が大学生の信頼感に与える影響を検証するために、55名を分析対象として調査を行った。その結果、次のことが明らかとなった。

- 1) 分析対象者全体の信頼感の変化は認められなかった。
- 2) 性差による信頼感の変化に、違いは認められなかった。
- 3) 「他者への信頼」が弱かった者は、フリークライミング授業を通して、その信頼感を強くした。
- 4) 「不信」をあまり感じていなかった者は、フリークライミング授業を通して、やや「不信」を感じるようになった。これは、適切な用心深さに変容したのか、或いは不必要に疑り深くなったのかの判断はできなかった。

信頼感の変化要因は、本授業のフリークライミングのみならず、日常生活の影響も考えられる。しかし、本研究においては、この非日常体験が、受講学生に心理的变化をもたらすトリガーとなることを前提としている。なぜなら、受講学生にとって、「クライミング」という極めて独特なスポーツに取り組むことは、非日常体験として強く印象づけられていると推測できるからである。しかし、今後の課題として、その前提条件も含め、調査プロトコルの工夫

改善が必要であると考えている。

謝 辞

本研究は、平成23年度筑波大学体育系学内プロジェクトの支援を得て実施されており、ここに深く感謝申し上げます。

文 献

- 1) 天貝由美子 (1995) : 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響. 教育心理学研究 43(4): 364-371.
- 2) 天貝由美子 (1999) : 一般高校生と非行少年の信頼感に影響を及ぼす経験要因. 教育心理学研究 47(2): 229-238.
- 3) 天貝由美子 (2001) : 信頼感の発達心理学. 新曜社.
- 4) Erikson, E.H (1959): Identity and the life cycle. University Press. (エリクソン E.H. 小比木啓吾 (訳) (1973) : 自我同一性. 誠信書房.)
- 5) 深田久弥 (1982) : 日本百名山. 朝日新聞社.
- 6) 永井将史、渡邊 仁 (2005) : 冒険活動が青年期の信頼感に及ぼす影響. 日本野外教育学会第八回大会プログラム・研究発表抄録集 : 76-77.
- 7) 永井将史、渡邊 仁 (2006) : キャンプ経験による青年期の信頼感変容とその要因の検討. 日本野外教育学会第九回大会プログラム・研究発表抄録集 : 84-85.
- 8) 永井将史、渡邊 仁 (2007) : キャンプ経験が青年期の信頼感に及ぼす影響. 国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要 7 : 53-61.
- 9) 徳山郁夫 (2003) : フリークライミングの授業成果の事例的研究—一般教育としての体験学習の意義—. 千葉大学教育学部研究紀要 51 : 137-145.
- 10) 渡邊 仁、井村 仁、坂本昭裕、東山昌央 (2006) : 冒険教育プログラムとしてのクライミングが体験者の生理および心理面に及ぼす影響. スポーツコーチング研究 5(1): 1-12.